

---

# 悪戯な思春期

片桐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪戯な思春期

### 【Nコード】

N1991BA

### 【作者名】

片桐

### 【あらすじ】

私は天草椎名。スターを愛する女子高生だ。適わない恋に思春期を捧げる毎日に、大きな変化が訪れる。人生記録風恋愛小説。因みに私が連載している”栗の変化”に登場する瑠衣とは関係ありません。私が瑠衣という名が好きなのです。

## スターの名は瑠衣

格好良いの定義を述べよ。

彫りが深い。声が心地よい低音。  
スタイルが良い。スラツとしてる。  
金髪だろうが黒髪だろうが似合う。  
ピアノが映える顔立ち。  
お洒落な服に負けない輝き。

そんな人、いる？

私は探してきた。

否、そういう人だけ見てきた。  
どういうことか。

つまり、理想の男性のファンでありつづけたのだ。何人かいる。  
八年前から大ヒット曲を生み出してきた”瑠衣”は、長い銀髪を  
編み込んだ斬新なルックスの持ち主だ。彼との関係が一番長い。サ  
ングラスマニアで1ヶ月は同じものが被ることがない。

当然私はサングラスを買い込むこととなった。彼のライブには七  
回行った。関東北部に住む自分にとって、東京ライブは近いもの  
なのだ。ギターもピアノもバスも興味は無い。彼だけを愛してる。

勘違いしないでほしい。

私は一般人だ。十七歳の今を生きる女子高生だ。瑠衣と目が合う  
ことすら適わない。適わないんだ。CDをいくらか集めたところで、  
触れられるのは声だけ。悔しいけど、それが現実。

勘違いしないでほしい。

これは、何の変哲もない女子高生が大スターを手に入れる壮大な

ラブストーリーなんかではない。寧ろ目も当てられない小さな私という個人の人生記録だ、と言えよう。

天草椎名。それが私の名前。

中学生の時にパソコンの某動画サイトにて、初めてPVと言われるものに心奪われた一人の少女。

韓流ブームが来ようが、洋楽ロックに入り浸っていた私が、初めて生まれた祖国のスターに恋をした。先に告白しておく、瑠衣は所謂V系だ。銀髪の時点で感じていたとは思っけど。

女性が喜びそうな同性との騒動が多く、友人に堂々と彼のファンだとは言いきつい。ただし、その名声は確かなもので、誰もが彼を画面で見るたび「瑠衣だ」と呟く。一流スターだ。最も、彼は百九十の身長をお持ちだから、否が応でも目立つのも事実。格好良いですよっ？

前置きはこの辺にしよう。

瑠衣でも私にでも興味を持った方だけ進んで欲しい。

私は瑠衣を愛してる。

そんな生活が永久に続いて良かった。

願わくば、瑠衣の側にたどり着きたい。

そんな適わない夢を抱く思春期だった。

生活が一変したのは。

## 呑まれる日常

『…今年の新曲の抱負ですか？』

瑠衣の声が私の部屋に優しく響き渡る。テレビのリモコンの音量ボタンに指をかけたまま、画面の中の彼に見とれてしまう。

瑠衣はこの春新曲をリリースした。半年ぶりのシングルに、世間は大注目している。私もその一人だ。

『悶え死んでしまう快感、ですかね』

片側を剃り上げた銀髪を撫で、ハッキリと言った。尋ねた司会者の女性がドキマギしながら質問を続ける。

『それは…恋人への思いということですか？』

観客席から黄色い歓声上がる。

（なんだ、お前らは誰を想像しているんだ？ 先日雑誌トップを飾った俳優の滋賀輝弘か？）

私は妙に冷めた心地で返答を待った。夕飯に作った緑野菜グラタンをスプーンで無造作に混ぜながら。生クリームの香りが部屋に漂う。

『僕はね、愛する人を思いながらファンに歌を捧げるほど器用じゃないよ』

憂いに満ちた眼差しをカメラに向けて、大スターは微笑んだ。心臓が張り裂けそうになるのを抑えて、私は水を注ぐ。

『…この歌は悲恋を描いてる。相手の心を手に入れられないのに自分だけ快感に呑まれてゆく、そんな愚かな恋を』

後ろに控えるアイドル達がヒソヒソと話している。司会者はマイクを握り直し、瑠衣の視線を避けながら相づちを打つ。あの眼を見てしまえば仕事どころではないはずだ。生粋の日本人だと言うのに、彼の目の奥には藍色の光が宿っている。

（アイドル五月蠅い）

苛つき始めた頃、瑠衣が徐に立ち上がった。打ち合わせと違ったのか空気が凍り、観客がざわめく。ゲスト用のベンチから離れた瑠衣は、誰も止める間もなく画面から消えた。

八年間彼を見てきた私もたじろいだ。グラタンが付いたスプーンを膝に落とすほどに。司会者が取り繕おうと唇を開いた瞬間、瑠衣の声がどこまでも響いた。

『愛するファンに告ぐ!』

(?)

一瞬でカメラがステージ脇の瑠衣を捕らえる。日本中が耳をそばだてているような沈黙が流れた。瑠衣は漆黒のスーツの襟元をはだけて、気持よく叫んだ。

『是非、この歌を胸に刻んで欲しい。間違ってもこんな幻想な恋に溺れるな。僕は君たちに幸せな愛を歌って欲しいから』

そしてミュージックがスタートした。無理やり予定を合わせたのが演出かは定かでない。どちらにせよ、彼はリスナー全員の心を引きつけてしまった。

(超絶マツハで格好良い…)

私は静かにスプーンを置いた。歌に集中するために。

「CRAZEでしょ、聴いたよ」

翌日登校早々、昨夜の話を持ち出した私を容易く遮り、美伊奈は言った。美伊奈の声は女性アイドルユニットのインタビューみたいに、いつでも高く可愛い。

「瑠衣、本当にすきなんだねえ」

呆れたようにクシャクシャと頭をいじってくる彼女を防ぐ。小学校来の幼なじみの美伊奈は、“瑠衣好き”に引かない貴重な友人だ。パーマをかけた茶髪をクルクルに巻いて、毎日クラスの注目を集めている。

部活も無所属だというのに、異様な人脈の広さの秘密は誰も知らない。

「新曲ヤバくない？ しかも昨日のサプライズなメッセージタイム！」

「ヤバくない」

朝の豆テストを淡々とこなしながら美伊奈は乾いた返事だ。幾分気を削がれつつも、私は喜びを分かち合うために必死に話を続ける。

「悶え死んでしまう快感、だよ？ こっちが死にそんな位の美声でよく言うよねー…ああ、CRAZE聴きたい」

美伊奈は頬杖をつき溜め息一つ吐くと、ポケットから何か取り出した。突然右耳に何かが差し込まれて、背中が反応する。

「ナニ？ イヤホンに感じてんの？」

そんな私を観察して彼女は艶やかに笑う。朱くなる顔を面白がってるのだ。

「違っ…うあああああ」

美伊奈のグロスがかつた唇がつり上がる。私の叫びの意味を知っているのだ。

「ク、CRAZE！」

「そおだよ。聴きたがつてたからさ。椎名、あんたまだ音楽プレイヤー持ってないんでしょ」

事実だ。両親がいない生活で、限界の生活費の中で、逆立ちしても音楽プレイヤーを買うお金はない。美伊奈は暫く口をパクパクさせて喜ぶ私を眺めていた。

（本当にs様だよ…）

それに気づきつつも、大事な四分間を瑠衣の声だけに使う。今回の新曲はバイオリンをバックに用いた、バラード風なものだった。とは言え、中盤になると切ない恋にもがく心情を瑠衣が叫びに近い声で熱唱するので迫力は文句無しなのだ。

「どうだった？」

ニヤツきながら美伊奈が訊く。

「…最高」

「あはは。あたしも今回ののはお気に入りなんだあ。ほら、早く鞆

片付けないと、二分後始まるよ」

時計を見ると、一限目がカウンタダウンを始めていた。廊下を一瞥し、教師の影を確認する。

(まずい…予習まだだ)

「椎ちゃん」

焦って数学の用意をしていると肩をたたかれた。天使の笑みを浮かべた魅美が立っていた。数学のノートを差し出し笑って言った。

「数学の予習まだでしょ？」

「ありがとう魅美ちゃんマジ天使！」

私はポケットから苺飴を引き出して魅美ちゃんの手の中に忍ばせた。クスリと笑って席に戻る彼女が時計を示すと、一分も無かった。慌てて荷物を整理する私の耳に、後ろの席の美伊奈のクツクツという笑い声が聞こえた。

昼食の時間、私は生徒会の仕事のため早々と教室を出た。早歩きで闊歩する背後から低い声で「天草さん」と呼び止められた。声の主はクラスメートの西雅樹だった。

「西君…？ なんか用？」

「天草さんってMだよな」

(なんつった今)

私は気持ちを鎮めて聞き返した。さっきのが聞き間違いか幻聴だと信じて。

「今なんて？」

西は二つの意味でクラスで浮いている。一つは天才的な頭の良さとその奇行。奇行と言っても時折威風堂々とボイコットする位だが、成績が優秀な分教師も注意を諦めた。

もう一つはルックスだ。正直瑠衣に似ている。悔しいほど長く濃い睫。百九十越えの身長とバランスよい体格。妖しく垂らした前髪。西とは三年生で初めて同じクラスになったが噂は聞いていた。集会の時もすぐ見つけてしまう存在だった。



瑠衣に恋してからその辺の男子と話しているのが面倒臭くなった。ショートヘアフェチの多い学年らしく、休み時間の度「天草さんの髪型って良いよな」だの「サラサラヘア彼女に欲しいわ」だの下らない冗談を言われてきたのだ。

（お前らが瑠衣位格好良いなら、な）

西は一度もそうした軽はずみな言動はしない。だからボイコットしようがハブられる対象にもならない。美男子は罪だ。

「Mでしょ？」

そんな西にいきなりこの言われようだ。

（なんかしたか、私）

「何なの？ 罰ゲームかなんか？」

人気の少ない渡り廊下で西と対峙している今の状況が何とも間抜けだった。西は艶やかな黒髪をかきあげて、いやらしく笑った。何故か、目を細めて上目遣いで笑えばそれはもういやらしく見えたからだ。

（やばい…なんか混乱してる）

ゆっくり歩み寄ってくる西に背中に冷たいものが走る。避けていた所為で久しぶりに話す男子の扱いがわからなくなっていた。それが伝わったのだろうか。西は三步程手前で止まった。

「俺、さ」

（なんだ？ なにを言う気なんだ？）

知らぬ間に心臓を握り締めていた。顔も火照っていたことだろう。瑠衣と西が重なり異様な興奮を呼び覚ましていた。

「椎名が欲しくて」

紛れもなく瑠衣の声だった。

無我夢中だった。

気づけば生徒会室の扉に背をつけて荒く息をしていた。仲間のメンバーが心配そうにこっちを見ている。走ってきたのだろうか、脹

ら脛がジンジンと痛んだ。

『瑠衣が欲しくて』

（ばっか…馬鹿じゃないの？ いつフラグ立てたの？ 立ててないでしょ。てか瑠衣と同じ顔で反則でしょ。本気になっちゃ…阿呆か自分）

「…なー。椎名ー？」

生徒会長の奈々宮が呼びかけていた。

「うん？」

「会議始めていいの？」

忘れていた。昼休みに会議するからと焦って来たのだ。なんとか席に座り話し合いを始めるものの、全く集中出来なかった。それはそれは分かり易かったのだろう。会議後に会長に呼び出された。

生徒会室脇の花壇にて会長と向かい合う。奈々宮千晴。私自身男と認識しないくらい、中性な人間だ。肩までの髪は校則をギリギリ破っていないが、女々しさを醸し出している。

立候補者の関係で唯一会長に抜擢されたが、リーダーには見えな  
い。その中身は逆で穏和ながらも厳しさを兼ね備えた指揮者資質を  
持っている。

「なんかあつた？」

「…」

（西君にM宣言されました）

脳内では答えながらも馬鹿馬鹿しく感じた。現実味がないのだ。

「…はあ。今日の議題は？」

私は少し考えて答えた。

「野球愛好会の部への昇格について」

「それは先月のだ」

まだ肌寒い四月。私はスカートの中で太ももをすり寄せた。気ま  
ずかった。会長と自分の周りでは桜吹雪が、それはもう美しいとい  
うのに。

奈々宮は寒さを考慮して木々の風下を選んでくれたが、足元を吹

き抜ける風は防ぐことができない。私は寒さに耐えて返答どころではなかった。

『凍てつく冬の白化粧の中

聖霊達を追い越して笑む

僕らを止めるものなんて

なにひとつ無いんだって』

「…つたる。聞いている？」

（はい、瑠衣の曲に気をとられてました。すみません）

「え？」

奈々宮は呆れ果てたのか細い手をぶらぶら縦に振って、戻ろう、と溜め息混じりに言った。どうやら、強制に追求する気は無かったようだ。私は孤独と安心に挟まれて校舎に戻った。

（教室で西と目合わせたくねえなあ）

避けるとそれは来るもので、生徒会室から戻る最中に私は西と鉢合わせしてしまった。

「天草！」

「うわ…マジか」

西の呼び方がワンランク変わっているのも気づかず、私は西の脇から逃げようとした。だが、瑠衣みたいに白い手に邪魔される。

（何から何まで瑠衣に似ているんだから…抵抗しづらいなあ）

「…怒ってる？」

西の顔が目の前にあつた。

（うわわ、怒ってないから離れるお）

間近で見た瑠衣…西の瞳は、藍色では無かったが引きつけられる何かがあつた。慌てて目を剃らすが残像が残っている。

顎のラインが細く、唇は赤みがかった。軽蔑するほど苦手な髭は存在すら感じられなかった。

爆発しそうな全身を抑えて、西をもう一度見る。睨みつけたつもりだった。

「…可愛い」

(ぎゃああああああ！ 瑠衣：瑠衣様の笑みだ。悶え死ぬ)  
一 昨年冬の冬のインフルエンザを鮮明に思い出すほど顔が熱かった。  
こんな体感は今まで無かった。男子に、瑠衣じゃない一般の男子に  
興奮するなど。

「悶え死にそう?」

西のいやらしい笑みが目の前にあった。

記憶が今日は曖昧だった。とりあえず、片時もCRAZEが頭  
から離れなかったのは確かだ。西に見つめられたときに丁度サビの  
『神すら射落とすその笑み』が流れて、卒倒しそうだった。

結論から言うと、私は西を殴り飛ばして逃げたらしい。五限目に  
彼がボイコットしたところを見ると、大分痛手を負わせてしまった  
ようだ。

(ももも悶え…悶え死にそうとか訊いてくるから)  
今朝まで圏外だった西が脳内の大半を占拠していた。瑠衣すら端  
に追いやられている。

(なん…っ…なんなんだアイツ)

「このM」

「にやあ!？」

余りに不意打ちな言葉に飛び上がってしまった。

「椎名はねー、sぶってるけどMだね。今も嬉しがってるし」

「…美伊奈あああ」

今は学校帰りに美伊奈と珈琲喫茶に来ていた。先ほどから記憶整  
理に暴走する私を静かに待っていた彼女だが、我慢の限界らしい。

「暴露しちゃってよお。西に告白されたんでしょう? 瑠衣スマ  
イルで」

「マジやめてそれ…」

美伊奈がニヤニヤしながら髪をいじくりまわす。

「あたしも見たかったなあ」 瑠衣スマイルが出来る男子がいた

とはね。しかも何だっけ…『悶え死にそう』とかっ最高すぎる。ウケる」

(受けねーつつうの！)

全力で否定したい衝動をブラックコーヒーで流し込む。苦い後味が喉内に広がった。美伊奈は黄色いカラコンを入れた妖艶な目で始終を見つめていた。

学校近くの喫茶は学生で賑わっていた。アンティークな小物が窓辺を彩る隠れ家的な雰囲気、女子高生の好みを掴んだ店なのだ。

「椎名って彼氏いたっけ？」

「いません！」

「奇遇だねえ、あたし六人」

「はあ？」

美伊奈は破顔して指で六を示した。優越感に浸ってか、それから上から目線で付け加えた。

「だから早く西君と付き合って、経験しちやいなよ」

(馬鹿なのか)

私は妙な汗をかいてきて、居心地の悪さを感じた。上着のポケットからハンカチを探り出して額を拭う。

「溜衣ばっか見てないでさ。モてるんだからチャンス逃しちやダメ」

カフェオレのストローをクルリと回して美伊奈が警告した。先から垂れた褐色の液体が雨の降り始めのようにテーブルを潤す。

「もてたことないです！」

「なに言ってるの、髪誉めて近づいてくる奴一杯いるじゃん」

一瞬ヘアフェチの奴らを思いだす。寒気が走った。

「あいつら…冗談！」

ペーパータオルでストローを拭きながら美伊奈は言い返す。

「あんなに選択肢あるのよ。羨ましいんだから」

「好きな奴いなきや意味ないじゃん！ てか誉められるのとか苦手だし」

「やっぱりMだ」

「どこが!」

「西君に責められて嬉しかったんでしょ? 瑠衣様のSキャラに骨抜かれてるんでしょ? 否定できる?」

「…出来ません」

私は負けを認めて、会計の札を持った。

喫茶を出て、二人で駅に向かって歩きながら延々としゃべった。マフラーにコートを着込んだ今は春風など気にならなかった。

「この間瑠衣がさ、司会者イジメしててさー」

「見た見た。『君って顔は綺麗だけど、僕の扱いは下手だね』って。なんかドキドキした」

「だから普通はドキドキしないって」

「あとさ美伊奈、ライブのときも『今夜僕に抱かれないなら、ステージに登って来なよ。一番にはキスしてあげる』って言って警備員に地獄の1日を送らせたんだよ。二万人の会場がグワってステージに襲いかかってさ」

「あんたは真っ先に走っていったでしょ? 警備員とかお構いなしに」

「そこまで大胆じゃな…お」

「どしたの?」

不自然なトーンを素早く感じ取った美伊奈が私の視線の先を見る。既に駅のホームに着いていた私たちの、向こう岸という形になるが。

「…西じゃん!」

(悪夢だ)

## 呑まれる日常（後書き）

殴り飛ばしてしまった西に椎名のとつた行動とは？

## 甘い低音

これはまずい、美伊奈すらも強張った。ホームの向こうは意外に近い。しかも、二人の今までの会話のトーンからして西は確実にこちらに気づいているはずだ。

(こっち見んなこっち見んな…)

半ば祈るようにして、私は電車が滑り込んで来てくれることを祈った。いつものようにサファリパークの宣伝に彩られた電車が。鳩が何羽か頭上の電線から優雅に、見下ろしていた。

隣の美伊奈が、ピンチかチャンスか見定めるようにキラキラ笑っている。

(あんたは…楽しんでるね)

遠くから断続的な金属音が響いてきた。私は期待して顔を上げる。顔を、上げてしまったのだ。

視界が変わり、端にいた西が中央に来る。西の顔はこちらを向き、眼は私を真っ直ぐ見つめていた。右頬には痛々しく青い痣。私の殴った跡だ。そして、電車が二人の間に割り込む瞬間、彼は唇を軽く上げた。

(るっ…瑠衣スマイルだ)

無言だったが、美伊奈も頷いていた。日本を代表するスターの笑みを持つ青年は、確かに私にだけそのスマイルをくれた。

美伊奈は電車に乗った途端堰を切ったように話を爆発させた。

「ヤバいね！ 西ってあんなに格好良かったっけ？ 背が高いのがあんな目立ってたっけ」

「美伊奈…落ち着いて。私のがパニックってるんだから」

所詮田舎の真ん中、車両内には私たち以外誰もいなかった。だからこそ二人は声を荒げていた。



「見た？」

「見た」

「あのスマイル…マジで瑠衣様でしょ」

美伊奈は壊れたオモチャみたいにかクカクと首を縦に振った。黄色い瞳の残像も揺らせて。

「ね…西君でなんなの？」

興奮が落ち着いた頃私は静かに尋ねた。

(変な奴。瑠衣様の弟。子供。甥)

「ドツペルゲンガー」

「どれも違った！」

「ん？ どした椎名」

「なんでもない」

西雅樹。謎。

何故さつき一言も発さなかったのだろうか。彼の学ランが風に靡く映像が蘇る。

美伊奈は恋する乙女を絵に描いたような、輝く顔で窓の外の風景を楽しんでいた。

(風景…私にとって西は朝までは風景だったのにな。それがいきなり視界を支配する君臨王みたいなの…なんか他に表現ないかな)

『悶え死にそう？』

弱冠十七とは思えない甘い声が耳を優しく引っ掻く。無意識に背中が反応してしまったようだ。美伊奈がニヤツいて「エロいよ。何考えてんの」と突っ込んだ。

夕日が二人の背後に差す。心地よい暖かさが電車を包み込んだ。

(帰ったら…寝よう)

風呂の湯船に身を横たえて、やっと私は息を大きく吐き出した。溜まっていたものが全部流れ落ちていくようだ。

冬を越えて日焼けを知らない肌は、自分でも眉をひそめたくなくなるくらい白かった。小麦色の肌に憧れる私は、苛々してボディソープ

を塗りたくった。シャワーで流すときには小麦色になってますように、とやけくそな願いを込めて。

お風呂から上がり、タオルで水しぶきを散らしつつ髪を拭う。ペタペタ裸足で歩きながら、家族のいない部屋の圧迫感を感じた。

(もう、三年。慣れたことだ)

内なる自分に励まされ、夕飯の支度を始めた時だった。テレビから悲鳴が聞こえたのは。

『瑠衣さああああん』

先日の司会者とは違う別の女性が叫んでいた。若者に人気のバラエティー番組だが、珍しく瑠衣が登場すると聞いてチャンネルを固定していたのだ。

瑠衣は、今宵は白シャツにジーンズという、ラフでいてどこか魅力的なスタイルだった。彼は今、巨大迷路に挑戦していた。だが、ハプニング発生のようで、スペシャルゲストの瑠衣だけが一時間経っても出て来ないようなのだ。

『瑠衣さんはまだこの迷路内にいらっしやるのでしょうか?』

『私は瑠衣様のパートナーだったのですが、何の連絡もまらっていない』

(瑠衣様なら真ん中の宝箱を開けたくらいで楽しめる方じゃない。あーあー、可愛そうに。随分と待たされて)

翻弄されて。泳がされて。

瑠衣とはそんな人。周りを引き回さずにはいられない、カリスマ性を持った人。

画面が切り替わり、瑠衣専属カメラマンが彼を映し出した。真っ白な壁に囲まれつつも、PV撮影と見紛うほど鮮やかに存在を主張する彼。

『恵ちゃん? 僕をおいていくなんて新しいプレイ? そんなにお仕置きされたいのかな』

孔雀メイクの片目を無邪気に瞑って見せて、パートナーの女優を窮地に追い込む。

『え？ だって瑠衣さんがこっちのルートを先に行けと』

『言い訳は聞かない』

視聴者全員が息を呑んだことだろう。瑠衣の周りの壁がスツと消え、彼は女性の後ろに立っていたのだ。スタッフも予想外の彼の動きに驚嘆する。

そんな周りを見向きもせず、瑠衣は目の前の女優の顎に指をかけた。

『今日のロケは僕のことご主人様って呼んで』

(うわあ…sだ)

誰もが顔を赤らめそうな台詞もさらりと述べるのが一流。確かにそうだ。

桜をバツクに、二人はドラマの中にいるようだった。身長差三十センチはあるうか、瑠衣が頭を撫でる仕草は、まるで父が子をあやしているみたいだ。

『は…い』

(言った！ 可愛そうに…本気だ)

その女優は瑠衣から目を離すことが出来なくなってしまった。今日1日、ご主人様と何回オンエアされるだろうか。世間の話題はそこに集中するかもしれない。

私はCMに入ったところでテレビを消した。眠気が限界だった。温めたグラタンカレーをそのままに、ベッドに横たわる。羽毛布団が優しく肌に吸い付いた。

『ご主人様って呼んで？』

ゾクゾクとした快感。

『天草さんってMだよね』

(ええ、そうですね。よくぞ見破りました。瑠衣の出演するドラマでは、冷たい台詞を何度も聞きたくなるほどに)

(いいの？ 認めちゃって)

内なる自分が意地悪く問いかける。

(西はまだ初対面みたいなものなのに、簡単に心の底の性格をさ

らけ出す気?)

(うるさいなあ…私の勝手でしょ)

(私も椎名なんだけど。骨抜きにされんのは瑠衣だけでいいと思  
うよ)

枕を手探りで引き寄せ、ボフンと顔を埋める。

(悶え死んじやえばいいの…)

(西の甘い声で?)

反論するまえに睡魔が襲いかかって、意識を無理やり手放された。

夢を見た。

二年前のハロウィンライブにて、瑠衣が血まみれの伯爵として出  
て来た。金に染められた髪が、秋空の下光っていた。

『お菓子をくれても悪戯するけど?』

会場が湧き上がる。瑠衣は恍惚とした笑みを浮かべ、デビュー曲  
からパーティーを始めた。私は夢心地で跳びまくった。

不意に、ポンと肩を叩かれたので相手を見ると西だった。雑誌で  
みた瑠衣の私服を着ていた。似合いすぎてて癢に触る。

「天草…俺、さ」

(私が欲しいんでしょう?)

『次の曲はCRAZEだ! 悶え死ねよお前たち!』

心臓の高鳴り。バイオリンが響く野外の歓喜の中、私は西の言葉  
に釘付けだった。西は瑠衣スマイルをして言った。

「瑠衣になりたいんだ」

CRAZEはファイナーレを迎え、周りの人々が次々に消えていく。

(ああ…もうハロウィンは終わり)

西は私の手をとってステージに向かい歩き出した。

「天草は俺のだよ」

「…ご主人様」

「…うっわあああああ!」

私は超絶マツハの勢いで飛び起きた。まだ唇にはさっきの言葉の余韻が残っている。頬がカアツと熱くなる。

(ごしゅ…ご主人つて)

瑠衣にならともかく、相手はクラスメートの西だ。自己嫌悪と、ゾクゾクとした快感に挟まれて、暫く思考停止状態に陥る。

「ピンポン」

今日は土曜日だ。土曜日のはずだ。

急いで寝巻きを着替え、髪を肩のあたりでカールさせると、玄関にダッシュした。「はい、おはようございまー…」

「やあ、天草。私服可愛いね」

「マジか」

そこにいたのは西雅樹だった。

(なんで！　なんで？　なんで…)

内側で悲鳴上げまくる私だが、表面は冷静そのものだった。

「何の用？」

西はチェックの上着と白のTシャツとデニムという格好だった。

オーダーメイドかと疑うくらい、彼の体の線が浮き上がっていた。

鎖骨が瑠衣にそっくりだ。慌てて目を逸らす。

「デートしようぜ」

桜吹雪が空を舞う。燕は隣のアパートに巣作り真っ最中だ。

(なんつっ…た)

俺様男子。決して流行らないこの言葉は需要の低さを示している。滅多にいないのだから。草食系が占める現代で。

「デート」

(そんな綺麗な顔で…顔…瑠衣に似ている…ああああ)

「…急に言わ…れても」

「電車で軽井沢行こう」

まるでプランは出来ていて、お前の返事一つで決まるのだというこの態度。余裕綽々だ。やはりこのルックスで女性経験は豊富なだろうか。

恋の駆け引きなど想像もつかない私は、西の一言に右往左往してしまふ。

(ムカつく…)

「もしかして…朝食まだ？」

「…ご名答」

私はそろそろとドアを閉めようとしたが、西が二の腕を見せながら手で制止する。頭の上のドアを掴まれたので、抵抗は難しい。西に覆い被さられているようで、心臓が正常に機能するのも難しい。

「わかった」

西がニヤリと笑う。

「俺、作るうか？」

(ああ…俺様男子とはあなたのこと)

結論から言うと、西の料理はプロ顔負けだった。親がいないため自炊には長けていると自惚れていた自分が恥ずかしいほどに。西はまず新鮮さを失った葉野菜をまとめて茹で上げ、その間にグラタンのルーとベーコンを混ぜて熱した。

それから戸棚の奥からパスタを取り出し、野菜を取り除いた鍋で煮た。クリームの方にはオリーブオイルを振りかけ、トロトロに煮込んだ。

全てが鮮やかで、私は化粧なども繕わずに彼を眺めていた。少ない調味料は全て役目を与えられ、隠し味にはナツメグが使われた。

真っ白な皿に盛り付ければ、イタリアレストランの看板メニューという肩書きも重くない仕上がりだった。感嘆の声を上げると同時に私の腹が鳴った。

(消えてしまいたい)

西は一瞬目を見開いたが、フツと笑って配膳をした。

「多分、クリームはキツくないと思うけど」

「…滅茶苦茶美味しいです」

「そう。良かった」

考えてみれば由々しき事態だ。まだ性格も把握してない思春期男子を二人きりの家に招き入れてしまったのだ。

(いや、招いてはいない決して)

西は両手を顔の前で組んで、ドラマに出て来る課長みたいに指の隙間からこちらを見ていた。カーテン越しに降り注ぐ陽光に彼が輝く。緑のチェックはグラデーションをつくり、魅了させるものがあった。

(ヤバい…ね。パスタの味がしなくなってきた)

「ほっぺ」

突然言われたので異国の言葉かと思った。戸惑う私の頬を節々しい西の手が触れる。ぬぐい取られたクリームが西の手の甲で艶めく(それをどうするの？ ティッシュは目の前にあるのよ)

内心期待しつつ、西の反応を見張る。瑠衣なら、瑠衣ならセクシ―に舐めとるだろう。西はどうする。

私はいつの間にか瑠衣と西を比較していた。今までしてきた拒絶のラインを計るためではない。そうでなければ西に飲まれてしまいうさだだったから。

「…見過ぎ」

西が低く響きの良い声で言った。

「あ、ごめん」

急いでフォークをくるくる回す。水音がしたのは一瞬後だった。何かを舐めるみたいな水音。

顔を上げては負けてしまう気がした。きっと西の伏せ目がちな仕草に心を奪われてしまう。それが怖かった。

だから、パスタとクリームが絡まるのを見て心を落ち着かせようとした。

「はははは」

だが笑い声に咄嗟に視線を向けてしまった。手の甲を外し、唇の端を舐める彼の姿に。悪戯な笑みで西は尋ねる。

「どうか、した？」

(うん。どうかしちやったまいたい)

ブンブン首を振って、残ったパスタをガッツク私はどう見えただろう。西は始終クスクス笑っていた。

食事を終え、紅茶を用意したものの、沈黙が空間を支配していた。

「…」

西は膝の上に頬杖をして、ぼんやり外を見ていた。焦っているのは私一人だ。西は思い出したように立ち上がった。

「電車の時間があと二十分しかない」

「あ、うん。行こっか」

(…あれ？ 行く気なの私)

西は格別な溜衣スマイルで私を助け起こし、玄関にエスコートする。身長差のせいで西の胸元が近かった。

西は後ろで私の靴選びを眺めていた。春先だからブーツで迷ったのだ。結局今のショートパンツに合わせて、焦げ茶色のロングブーツをセレクトした。

西が出た後に鍵を閉める。もう、後戻りは出来ない気がした。

「あのさ…」

「急ぐよ」

有無を言わさぬ口調と共に手を掴まれ走り出す。コンクリート舗装の道とはいえ、ブーツで走るのは酷だ。しかし、私は不平を言えなかった。空気を壊したくなかった。

西が前を走っている。横顔は溜衣の若い頃そのものだ。こんな錯覚はしてはいけないかもしれない。西は西なのだ。西雅樹という人間なのだ。溜衣じゃない。

(ごめん西…でも今私滅茶苦茶嬉しい) 駅に着き、西が手早く切符を買って電車に滑り込んだ。二人とも暫く呼吸を整え、それから空席を探した。まだ西が手を握っていたが、嫌な感じは無かった。



休日の混雑を予想したが、車内は比較的空いていたので、進行方向に平行な座席を選び座る。当たり前だが隣同士だった。

「大丈夫？」

ふと西が心配そうに声をかける。

「余裕」

私は何故か負けん気になって答えた。

（まだまだ弱みを見せる気ないんだから、瑠衣ジュニア君）

しかし、西とは何者なんだろうか。いちいち瑠衣を連想する仕事。俺様な態度。

M宣言の衝撃など薄れるほどに私は彼に夢中になり始めていた。恐ろしいくらい容易く。瑠衣に恋に墜ちたときのように。

## 甘い低音（後書き）

実話に基づくとというのは、私が好きで堪らない芸能人が正にこんな方だからです

## 瑠衣と西

瑠衣に出会ったのは八年前。その頃は派手な彼の姿に恐怖すら感じたのを覚えてる。悪魔。漆黒の両翼を揺らし、空気を貫く声で歌う彼は、正しく悪魔そのものだったから。

再会は五年前。中学二年でパソコンに興味が出てきた頃、友人の家でいじらせて貰ったとき、彼の動画にたどり着いた。瑠衣は、悪魔から魔王と化していた。肩まで伸びた髪を舞わせ、黒く染めた唇で笑う。

『心臓まで食べてしまおうか』

そんなキャッチフレーズが似合うのは彼だけだった。通算三枚のアルバムはどれもメガヒットを飾り、V系の見方を変えさせた人物だ。そして中学三年の頃は空前のV系ブームが巻き起こっていた。

クラスの男子も町行く男性も前髪を垂らして、メイクに手を出した。瑠衣に適う訳ないのに、と私は内心馬鹿にしたものだ。

シングル『guitar』こそが、私と瑠衣を結びつけた運命の曲だった。そのPVは戦争の終わった荒野で武器の山の跡をひたすら歩き嘆く瑠衣を表していた。確かその頃三十二歳だった瑠衣はしわ一つない美貌で、重いメッセージを見事に伝えきった。

CDを買い始めると、食費を抑えねばならなくなった。政府からの補助金だけではどうにも贅沢は出来ない。それでも両親の不在を恨む気はさらさらなく、体重を減らしても瑠衣に聴きしれた。

(瑠衣の誕生日：瑠衣の生い立ち：瑠衣の好きなもの嫌いなもの恋に恋する高校生になっても、私の注意は瑠衣にだけ向けられた。誕生日には手作りのクッキーを贈り、年賀状が来るのを心待ちにした。人生全てのエネルギーを瑠衣を知ることだけに捧げたかった。同性との恋愛疑惑も瑠衣なら許されると、勝手に考えたりした。

カラオケは友人と行きづらくなった。誰も瑠衣の曲は女子が歌うものだと思わなかったのだ。いつも気まずい中、それでも大画面の

瑠衣のPVに心踊らせた。

「椎名っていうん？ 瑠衣好きで有名な」

美伊奈は確か高一の後半に親しくなった。一緒にライブも行った。叫びまくっても泣いても引かなかった。

gilly程の大作は少ないものの、瑠衣は既に世界ツアーを行う大物アーティストとなっていた。本気でアメリカにでもライブを見に行こうと思ったが、パスポートの発行が孤児には面倒だった。

迎えた今年の新春番組は総ナメし、瑠衣がいないチャンネルなどなかった。鍛え上げられた体と、大衆を引きつけて離さないルックス。彼は最強と呼ぶにふさわしい人だ。

「好きな人いる？」

「瑠衣」

「現実で、だよ」

「なに？ 瑠衣は生身の人間ですけど」

「手の届く範囲の話」

そんなもの考えるのは大学生になってからでいい。手の届く範囲に瑠衣はいない。そう思っていた。

「着いたぞ」

うたた寝していたようだ。軽井沢の新鮮で冷たい空気が車内に吹き込んでくる。寝ぼけた頭で隣に西がいる理由を考えながら、二人は降りた。相変わらず西は手を握っていた。

「…手」

「何？」

西は冷静に振り返った。私は瑠衣にしか見えない彼に抱きついてしまった。勿論腕を絡ませる程度だが。

「…動き辛くないか」

「いいじゃん…こうしても」

夢みたいだった。瑠衣に触れてる。周り中が嫉妬している。しか

し、彼は西雅樹。忘れてはならない。

ゆつくり二人はショッピングモールへ続くレンガ道を歩いた。電車の移動は三十分程度だったため、会話らしい会話もなかった。実際こうして二人という状況を把握すると違和感極まりない。

そもそも西は昨日私が殴ったことはきれいに水に流してくれたのだろうか。高い彼の頭は何を考えているか汲み取れない。

(怒ってんのかなあ?)

暫く歩いて、二人はアンティークショップに入った。可愛らしいものではない。一言で言えば、ロツクな店。私の趣味だったが、ついてきた西がどう思ってるか気になる。早速瑠衣のツアー中の衣装を思い出しながら雑貨を吟味する。

髑髏の腕輪。十字架を繋げたネックレス。竜が絡みついた指輪。どれも女子高生が好んで買うものじゃない。しかし、目を輝かせて色々つけ試す私を、店員は同士だとも言うように、気さくに接してくれた。

西は、やはり瑠衣が選びそうなアクセサリーをつけては外し、瑠衣スマイルを浮かべていた。

(これってデートって言えんの?)

そう思いつつも、滅多に來れない専門店を私は満喫していた。新春セールから更に値引いて買った三点は、先ほどの3つ。

大はしゃぎの私は西の顔を見て平常心を取り戻す。彼はとても冷ややかな目で私を見つめていたからだ。

(引かれたかなあ)

西は吸血鬼をモチーフにしたバンダナだけ購入した。今年のハロウィンで瑠衣がつけそうだ。

ショップを出ると一時を回っていた。

「コーヒー飲める?」

「ブラックなら」

何故か私はコーヒーに何か混ぜた時点で飲めなくなる。純粹な味が存在するというのにわざわざそれを消してしまうのが理解不能だった。

西は軽井沢に来慣れているのかもしれない。若者が集う喫茶店に案内してくれた彼を見て思った。

「天草ってさ…V系とか好きだろ」

喫茶店までの短い道中西が言った。

（そりゃもう瑠衣が）

「よくわかったね」

「理想は瑠衣だろ」

返事が出来なかった。

今朝からの私の態度を見て言っているのか、それともただの推測なのか計り知れない。私は肯定も否定もせず、彼の傍らで固まった。

「ついてきてくれてありがとう」

（ああ…彼の次の言葉は）

「言つたる？ 瑠衣になりたいって」

「どういう…意味？」

西はフツと含み笑いをして、喫茶店とは逸れた道の橋に連れ出した。木々の中で、私を見つめると不意に両肩を掴んだ。瑠衣の両目が鼻の先にある。

「俺、さ…」

まただ。思わせぶりな間を空ける。瑠衣もトークショーでは大抵不自然な間を空ける癖があった。全てのカメラが自分に向けられているというのに、じっと考えて答えるのだ。

その間がどれほどファンサービスか本人はわかっていない。いや、わかっていて聴衆の視線を独占しているのだろうか。

今、西の顔と向きあい、心臓は尋常じゃない速さで鐘を慣らしている。警鐘なのか、祝福の鐘の音なのかは判断つかない。

「俺は、瑠衣以上にそばにいる」

(ああ、なんていう…)

私は目頭が熱くなるのを感じた。人の好みはよりけりだが、学年一の美男子が真剣に思いを伝えてきている。それだけではない。彼は私が瑠衣の幻想を重ねて見ているのを知った上で告白している。

返事を選ぶ権利など自分にあるのだろうか。瑠衣と同じ顔で自分を求めてくる西を。

「も…」

私は滅茶苦茶恥ずかしいことを言おうとしていた。今日の今という空気だから言えたのかもしれない。一生思い出す度に赤面するこ  
とだろう。

「も？」

西は知ってか知らずか飄々と尋ねる。

(全ての椎名：お前らも全員同罪ね)

(あたしを巻き込むなよ)

(言える訳ないです)

「悶え殺して下さい」

世界が拍手喝采をした。そんな気がした。

帰りの電車で西は何度も思い出して笑っていた。クスクスと聞こえる度にカアツと熱くなる全身を両手で目一杯抱きしめた。それこそ痛い位に。

「俺さ…小学生の時に瑠衣を初めてみたんだけど、生き別れた兄弟かと思っただよな」

「そう…思っても不思議じゃないよ」

(だって似すぎだもん…声も雰囲気も、性格に仕草だって)

「まあ、そしたら二十歳上の兄貴になるけどね」

瑠衣は今三十七歳となった。変わらぬ容貌に常に整形疑惑が生まれるが、それは全て根拠のないガセであることを私は知っている。

「やっぱ…甥とか？」

「あり得ないだろ」

キツパリ言い切られて幾分か切なくなってしまう。ずっと瑠衣を想ってきた自分は、まだ彼との繋がりを求めているようだ。

「瑠衣になりたかった」

(…?)

「一般人の俺にとって、瑠衣の生き方は羨ましくて仕方ない」

それもそうだ。日本人どころか世界に期待されるスターなのだから。

「でも…瑠衣になったら、私は会えなかったんだろうねえ」

何気なく呟いたが、その真実が綺麗に今の瑠衣と当てはまり、西に申し訳なく思った。断続的に車体が揺れる。

「会えない方が良かった？」

「そこで今返事できるほど西のこと知らないし」

「確かに…まあ、そのまま瑠衣だと思えばいい」

(いいの？ 五年間の片思い舐めないですよ。瑠衣への執着半端じゃないんだからね。後から後悔しないでよ)

私はアンティークショップの紙袋を抱き締めて、西を睨みつけた。その睨みは長く続かなかった。突然、西が顎を持ち上げたからだ。昨夜のオンエアの通りに。あの女優の気持が今なら痛いくらいわかる。

瑠衣の蒼い目ほどではないが、西は深紫を携えていた。呑まれてしまいそうな深さに前後感覚も消えてゆく。

「ナニ？ 感じてるの？」

美伊奈と同じ台詞に恥も忘れてわなわなと震えた。勢い良く西の手を叩くと、怒鳴るように言った。

「か…っんじてない！」

車内の空気が凍る。囁くような西と違って、私は目立ちすぎた。突き刺さる視線に紙袋を盾に赤い顔を隠す。

西は腹を抱えて笑っていた。彼も違う意味で視線を集めていた。

やはり通常の男子より格段と格好良いのだ。周囲の女性が幸せな笑



みを西に送る。

(この優越感は…慣れません！)

「やつぱりMだ」

「ねえ、なんでいきなりそれ言ってきたの？」

私は結構気になっていたことを尋ねた。

「なんでだと思う？」

「学校では、バレないように振る舞ってたつもりなんだけど」

西は軽やかに笑った。

「振る舞ってたつもり？ sに？」

さも可笑しそうに述べる彼に、私は意味もなく恥ずかしさを感じた。

「そう…だよ？」

「ちなみに天草ってさあ」

不意打ちだった。西が私の側にある腕を上げたかと思うと、それで頭を抱かれた。彼に寄り添う形だ。肩の力が抜ける。

あまりのことに口をパクパクする私の耳元で西は囁く。

「こうされんのか…」

今度はもう片方の手で私の頬に触れ、上体を傾けた。視界が西で一杯になる。遠くで女子高生が騒ぐ声がする。

「チュッ」

可愛い音がした。私は呆然として、たった今唇を奪った男を見る。女子高生達の黄色い歓声は私たちを見てのものだったようだ。

西は瑠衣スマイルでスツと離れた。

「こうというのが好きだろ」

私は震える手で唇をなぞった。今の行為を整理するように。しかし、脳内は煮えたぎり、私から理性を取り上げてしまった。

(キス…キスされた)

(椎名の名においてぶっ飛ばそ)

(ばか。嬉しいくせに)

(黙れ自分)

西は離れたものの相変わらず私の頭を抱いていたので、身動きがとれない。訴えるように睨めば、夕日を浴びた悪魔みたいな笑みがそこにあつた。

「ほら？ 無理やりされたくせに嬉しそう」

（私は…とんでもないことをしてしまったかもしれない。瑠衣く  
らい、いや、もしかしたら瑠衣以上の男に捕まってしまったのかも  
しれない…西…あんた何者？）

瑠衣と西（後書き）

慣れない恋愛小説にあたふたしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1991ba/>

---

悪戯な思春期

2012年1月6日20時48分発行